

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。

阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

## 装飾古墳模写の先駆者

日下 八光 氏

日下八光は明治32年（1899）、那賀郡羽ノ浦村（現阿南市羽ノ浦町岩脇）に生まれた。幼少の頃から絵を描くのが好きだった日下は、県立富岡中学校を卒業後、東京美術学校（現東京芸術大学）日本画科に進学する。

大正15年（1926）日本画科研究科を修了し、昭和3年（1928）東京美術学校の嘱託となる。昭和4年（1929）から翌年にかけて、同校の嘱託を受け朝鮮総督府博物館で、敦煌・トルファンおよび高昌の壁画の模写に従事した。その後、昭和5年（1930）から、東京帝室博物館（現東京国立博物館）で各種の古画の模写を行う。この頃、帝国

美術院展にて作品が次々と入選するほか、各種展覧会に出展し、日本美術界に大きな功績を残す。

昭和19年（1944）これまでの功績が認められ、東京美術学校助教授、翌年、同校の教授に就任。昭和29年（1954）から3年間、文化財保護委員会の嘱託により、宇治平等院鳳凰堂の解体修理に際し、装飾画の模写と復元作業に携わった。

さらに昭和30年（1955）から文化庁の嘱託により、福岡県の玉塚古墳の壁画の模写と復元を行った後、九州・関東・東北地方の数多くの装飾古墳の複写と復元に従事しながら、美術教育の指導・研究を続けた。

後日、日下と共に古墳の壁画の模写・復元に携わった画家は、日下の仕事に対する態度を次のように語っている。「日下の徹底した仕事ぶりは模写の方法にも現れ、セロハンを壁に当てて残された線と点を一点一点写し取るという精巧極めた根気のいる作業をしていた。」

日下は、東京芸術大学移行後の昭和42年（1967）に退官するまで教鞭を取り、翌年同大学の名誉教授となった。在職中、日下が学生の指導・模写に対する心構えとして「ともあれ講義に差し支えないように春と夏、それに冬の休みを全部使って模写することにしました。引き受

けたからには、それまでの模写とは違った精密さを追求することにしました。」と決意を述べている。

さらに、日下は石室のなかに終日こもり、一旦模写を始めると食事を取る時間も惜しんで、途中で筆を置くことはなかったといわれている。

その後、昭和49年（1974）から翌年にかけて、古代美術研究のためインド・ヨーロッパ各地を旅行している。

これまで日下が文化庁から依頼され作成した装飾古墳の模写のすべては、国立博物館に移管されている。

平成5年（1993）10月から同6年（1994）にかけて国立歴史民俗博物館の開館10周年記念として、主催国立歴史民俗博物館・朝日新聞社、後援文化庁で、「装飾古墳の世界」の展覧会が開催された。展覧会の作品は、日下八光の40年以上に及ぶ壁画の模写と複製の大事業を中心に公開された。この展覧会には20万の人々が訪れたといわれている。

生涯、日本画の指導・制作・装飾古墳の模写・復元に取り組んだ日下は、平成8年（1996）、96歳の天寿を全うした。



福岡県竹原古墳後室奥壁の壁画  
日下八光氏模写



大分県日田穴観音古墳の壁画を模写する日下八光

### 参考資料

「阿南市の先覚者たち 第一集」  
2014・阿南市文化協会

次回からは、阿波公方についてを紹介  
します。

### 問い合わせ

文化振興課 ☎22-1798